



Title	アウグスティヌスの『三位一体論』について(再論)
Author(s)	中川, 秀恭
Citation	北海道大學文學部紀要, 15(1), 21-48
Issue Date	1966-12-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33311
Type	bulletin (article)
File Information	15(1)_PR21-48.pdf



[Instructions for use](#)

アウグスティヌスの『三位一体論』について（再論）

中川秀恭

アウグスティヌスの『三位一体論』について⁽¹⁾(再論)

中 川 秀 恭

アウグスティヌスの『三位一体論』⁽²⁾(De trinitate libri quindecim) 十五卷は、二つの部分に分けることができる。すなわち、第一部において、彼は先ず聖書に基づいて三位一体を述べ(一―四卷)、次にそれをドグマの形式にととのえる(五―七卷)。第八卷からはじまる第二部では、三位一体のアナロジー⁽³⁾を人間の経験の領域に求め、その構造を開示することによって、人間の精神(mens humana)を三位一体なる神の直観にまで導こうとしている。⁽⁴⁾かくして、本書は権威とそれになりたいとする信仰とによる事実の設定⁽⁵⁾と、理性によるこの事実の認識とから成っており、「わたくしは知らんがために信ずる」(credo ut intelligam)の定式によって構成されているということができよう。⁽⁶⁾以下わたくしは、アウグスティヌスが如何にして人間の経験の領域で三位一体の像(imago trinitatis)を追及して行ったかを、本書第八、九及び十卷において跡づけ、検討しようと思う。

カトリック信仰(fides catholica)によって告白され、聖書を通して証しされた三位一体を、知性によって追及する

という困難な作業をはじめるにあたって、⁽⁷⁾アウグスティヌスは一つの規則を立てる。「われわれの知性にとって未だ明かになっていないものも、信仰の確実性から切りはなしてはならない。」(illa regula, ut quod intellectui nostro nondum eluxerit, a firmitate fidei non dimittatur. VIII, 1, 1)。⁽⁸⁾ 探究の途上においては、信仰によって告白された事実が未だ知性によって認識されない。しかし、だからと言ってこの信仰の確実性を疑ってはならない。否、むしろ信仰が知性の探究の到達点を先ず示し、その探究を導くのである。かくして、三位一体の探究は、先ず三位一体を信じ、次にこれを知性によって認識するために人間の経験の領域において三位一体の像⁽⁹⁾を追及し、最後にこの追及を通じて人間の精神を浄化して、神の三位一体の直観にまで至ろうとするのである(D. J. 3)。この最後の段階で、信仰と知性による認識とが同一の事実を対象としていることが明かになる。右の規則は、この段階に達するまでの探究を導くためのもので、たとえ知性によって認識できなくても信仰の確実性を捨てることなく、それにたよるべきことを命じる。これについては別の個所で次のように言われている。「信じられるべきことがらについては、信仰を失うことなしにこれを疑い、知解されるべきことがらについては、分別をなくすることなしに断言しよう。前者においては權威が堅持されねばならず、後者においては真理が探究されねばならない。」⁽¹⁰⁾ すなわち、一、信仰によって先取したことがらをどこまでも忠実に保持しながら、それに懐疑を向けて行く、しかもこの懐疑——探究——によって知られることは思慮深く一歩一歩確保して行く。二、こうして信仰の領域においては權威を、認識の領域においては真理を保持しつつ探究をつづけ、やがてこの權威と真理とが一つとなるところにまでいたる。このようにして、探究は權威の支配する信仰の領域を真理の支配する認識の領域にまで深化する。もとよりかかる認識——それは観想(contemplatio)と呼ばれる——は、完全な形ではこの世では得られないが、しかしこの認識、すなわち真理の直観を目指して知

性の探究がつけられるのである。Certa enim fides utcumque inchoat cognitionem: cognitio vero certa non perficitur, nisi post hanc vitam, cum videbimus facie ad faciem. IX, 1. 1.

人間の精神はこの規則に導かれて三位一体の探究をつづける。しかし、この規則は精神が探究の道をまちがえないための守り役で、その任務は消極的である。精神はその外に積極的な導きを必要とする。アウグスティヌス自身、三位一体探究の途上、この導き手の必要を痛感しているのであって、それがいたるところに祈りの形式で現われている。「われわれはいとも信心深く敬虔に神に嘆願しなければならぬ。神が理解の眼を聞き、論争熱をさまし、かくして精神が、嵩みもせず動きもしない真理の本質を認知するようになし給わんことを」と。¹¹⁾ここに言われている「理解の眼を開き給わんことを」とは、神の永遠の光りが人間の精神の中にさし出て、理解の眼を開くことをねがい求めることをいう。人間の精神は内なる教師 (magister internus) としてのこの光りによってはじめて、自己自身の真相を見きわめることができる。しかし、この内なる光りは怠惰な精神の祈りにはこたえない。それは人間が能うかぎり精神のまなざし——注意 (attentio mentis)——を集中し、いとも信心深く敬虔に嘆願するときをはじめ、人間の内なる闇を照らし、そこに明るい視野を形成する。祈りに伴う注意の集中を通じて、神の光りがさし出るのである。¹²⁾

次に、多くの被造物中、その何れについて三位一体の像をたずねることができるであろうか。これらの被造物中特に優位を占めるものがあるであろうか。アウグスティヌスは人間に卓越した地位をあたえる。多くの被造物の中で、ひとり人間のみが神の像に似せて造られた。それ故に、三位一体を求めて多くの被造物の間をさまよう必要がない。人間が自己自身に還帰するとき、そこに三位一体の神の像が見出されるのである。¹³⁾その際、各自がそれぞれ自己に還帰し、自己の内にこの像を発見しなければならない。わたくしがあなたの内へ、あなたがわたくしの内へ帰るので

アウグスティヌスの『三位一体論』について（再論）

はなく、わたくしはわたくしへ、あなたはあなたへ帰って、それぞれのうちに三位一体の像を見出さねばならない。⁽¹³⁾しかも、各々の自己の内に見出されるものは、各自を越えた「共通の本性と実体」(communis natura et substantia. Sermo, 52, 17) を⁽¹⁴⁾。

それで、アウグスティヌスにとって三位一体の像を探究する場所は、各自の内面性 (Innerlichkeit) である。⁽¹⁴⁾ 真理探究の道は自己の内面への沈潜であり、真理探究の場所は内面性である。⁽¹⁵⁾ この態度は彼の最初の著作『アカデミア派を駁す』(Contra Academicos, 386 A. D.) から晩年まで一貫しているのであって、ここにわれわれは彼が近代の精神に訴える所以を知ることができる。⁽¹⁷⁾

ところで、内面性と言っても必ずしも自明ではない。アウグスティヌスが神の像の座、乃至場所としてとらえた事象は何であったか。彼はそれを愛 (dilectio, caritas) において見出した。「神は愛である。愛のうちにいる者は、神にあり……」(ヨハネの第一の手紙四・一六)。⁽¹⁸⁾ 人間は神を求めて自己の外なる形体的なものとの間を遍歴する必要がない。自己のうちなる愛の事象のうちこそ神がいますのである。⁽¹⁹⁾

これで分るように、アウグスティヌスは先ず聖書の権威によって、神を愛として設定する。⁽²⁰⁾ 次の作業は、この愛の事象を分析してその構造を露呈し、三位一体の像を探究する場所を開示することである。⁽²¹⁾ 彼はこの愛をきわめて日常的な、手近かなところに求める。人間と神とを結ぶ愛と言っても非常に高遠な事象ではない。愛とは何か、と問う前に、彼をして彼の兄弟を愛せしめよ。しからば彼は、自らの問うその愛を愛するであろう。何故なら、そのとき彼は自らが愛する兄弟を知るよりも、この兄弟を愛する所以の愛を、より多く知るからである。したがって、彼は兄弟を知るよりも、より多く神を知ることができる (VIII, 8, 12)。かくして、兄弟にたいする日常的な愛は神の愛につながる

り、兄弟愛の中に含まれる認識は、神の認識につながる。

このような愛とは何か。その構造を問うて見よう。愛は、一、愛するもの、二、愛されるもの、三、愛の三つから成り立っている。⁽²²⁾ 愛とは或るものと或るもの、すなわち愛するものと愛されるものとを結びつけようとする生のほたらきである。⁽²³⁾ かかる構造をもつ愛が三位一体の像の探究の場所であり、そこから更により高いものを求めて上昇する出発点である。求める三位一体が既に発見されたというのではない。むしろ、それを求むべき場所、乃至地平が発見され、確保されたのである。

このようにして、三位一体を追及する知性を導くための規則と、それを求めるべき場所とを確定し、三位一体論第二部(第八一―五卷)のための方法的予備作業を終えたアウグスティヌスはここでしばらく休息し、新しい探究に備える。⁽²⁴⁾

(1) わたくしはかつて「アウグスティヌスの『三位一体論』について」と題する論考を「宗教研究」第一二九号(昭和二十七年三月)に発表した⁽²⁵⁾が、当時在外研究中であつたために校正する機会を得ず、ために誤字、誤植が多く、他日校を改めたい所存であつた。この度たまたま少閑を得たので全篇を推敲して書き改め、ここに「再論」として発表することとした。

(2) 本書の成立年代については、研究者の間に見解の相違がある。例えば、シマウス(M. Schmaus, *Die psychologische Trinitätslehre des hl. Augustinus*, 1927, S. 4) は、⁽²⁶⁾ 三九八―四一七年であり、ヴァーノン(J. B. Vernon, *Augustine's*

Quest of Wisdom, 1945, Appendix) は、⁽²⁷⁾ 四〇〇―四一六年である。この問題に關しては E. Hendrix, *La date de composition du De Trinitate*, *L'Année Théologique Augustinienne*, 12, 1952, p. 305-316 參照。

なお、キヌートは *Sancti Augustini operum tomus XI, opera et studio monachorum ordinis s. Benedicti e congregatione s. Mauri, editio tertia veneta*, 1797 を用いた。

(3) アウグスティヌスの「三位一体の像」(*imago trinitatis*, *Sermo*, 52, 17) 參照。⁽²⁸⁾

(4) Vgl. *De trin.*, XV, 3, 5.

- (5) quod Pater et Filius et Spiritus sanctus, unius ejusdemque substantiae inseparabili aequalitate divinam insinuent unitatem; ideoque non sint tres dii, sed unus Deus: quamvis Pater Filium genuerit, et ideo Filius non sit qui Pater est; Filiusque a Patre sit genitus, et ideo Pater non sit qui Filius est; Spiritus sanctus nec Pater sit nec Filius, sed tantum Patris et Filii Spiritus, Patri et Filio etiam ipse coaequalis, et ad Trinitatis pertinens unitatem Haec et mea fides est, quando haec est catholica fides. I, 4, 7.
- (6) Vgl. E. Gilson, Introduction à l'étude de st. Augustin, 3 ed., 1949, p. 13.
- (7) credamus Patrem et Filium et Spiritum sanctum esse unum Deum Hoc autem quaeramus intelligere. IX, 1, 1.
- (8) De credendis nulla infidelitate dubitemus, de intelligendis nulla temeritate affirmemus: in illis auctoritas tenenda est, in his veritas exquirenda. IX, 1, 1.
- (9) Deoque supplicandum devotissima pietate, ut intellectum aperiat, et studium contentionis absumat, quo possit mente cerni essentia veritatis, sine ulla mole, sine ulla mobilitate. VIII, 1, 1.
- (10) Vgl. E. Gilson, Introduction a l'étude de st. Augustin,

3ed., 1949, p. 88-103.

- (11) Attendamus quantum possumus, et invocemus lucem sempiternam, ut illuminet tenebras nostras, et videamus in nobis, quantum sinimur, imaginem Dei. IX, 2, 2.
- (12) Quo ibimus? Ad coelum, ut de sole et luna et sideribus disputemus? Ad terram, ut forte frutetis, de arboribus, de animalibus terram implentibus? An de ipso coelo, an de ipsa terra...? Quamdiu homo circuis creaturam? Ad te redi, te vide, te inspice, te discute. Quaeris in pecore, quaeris in sole, in stella? Quid enim horum factum est ad imaginem et similitudinem Dei? Prorsus familiarius et melius aliquid horum quaeris in te. Hominem enim Deus fecit ad imaginem et similitudinem suam. In te quaere, ne forte imago Trinitatis habeat aliquod vestigium Trinitatis. Sermo, 52, 17.
- (13) トラスクトヤスククは「智的探求」(modus interior. VIII, 1, 1.) の註のりふり。 Vgl. A. Schindler, Wort und Analogie in Augustins Trinitätslehre, 1965, S. 170.
- (14) Vgl. M. Grabmann, Grundgedanken des hl. Augustinus über Seele und Gott, 2 Aufl., 1929, S. 1ff.
- (15) Vgl. M. Grabmann, op. cit., S. 11.
- (16) 『聖書』によれば、トラスクトヤスククは三八〇年頃「美しき顔のりふり」(De pulchro et apto) の題する論文を書き、

ローアの弁論家とエリクスに献している。これが彼の処女作なのであるが、紛失してどうなったか分らないと自ら言っている位であるから、ここでは『アカテミア派を駁す』を最初の著作と置くことにする（『告白』第四卷一三、一四、一五）。

- (17) Vgl. A. C. Vega, Saint Augustine. His Philosophy, 1931, p. 201 ff.
- (18) Deus caritas est, et qui manet in caritate, in Deo manet (VIII, 8, 12). アウグスティヌスはこの聖書の句を別の箇所 (VIII, 7, 10) では Deus dilectio est, et qui manet in dilectione, in Deo manet としている。彼はカリタスとテイレクテイオを同義に用い、それは善への愛であるという (Quid est autem dilectio vel caritas, quam tantopere Scriptura divina laudat et praedicat, nisi amor boni? VIII, 10, 14)°
- なお、VIII, 8, 12 におけるヨクネの第一の手紙四・一六の引用はウルガタと一致しているが、アウグスティヌスはラキストには一般に古ラテン訳を用いたらしい。Vgl. F. Kenyon, Our Bible and the Ancient Manuscripts, 4 ed., rep., 1948, p. 181.
- (19) Quapropter qui quaerunt Deum per istas Potestates, quae mundo praesunt vel partibus mundi, auferuntur ab eo, lon-

geque jactantur; non intervallis locorum, sed diversitate affectuum: exterius enim conantur ire, et interiora sua deferunt, quibus interior est Deus Ecce Deus Dilectio est: ut quid imus et currimus in sublima caelorum et ima terrarum, quaerentes eum qui est apud nos, si nos velimus esse apud eum? VIII, 8, 12.

- (20) Resistere non possumus certissimae fidei, etv alidissimae auctoritati Scripturae dicentis, Deus caritas est. IX, 1, 1.
- (21) Vgl. M. Schmaus, Die psychologische Trinitätslehre des hl. Augustinus, 1927, S. 225.
- (22) Amor autem alicujus amantis est, et amore aliquid amatur. Ecce tria sunt, amans, et quod amatur, et amor. VIII, 10, 14.
- (23) Quid est ergo amor, nisi quaedam vita duo aliqua copulans, vel copulare appetens, amantem scilicet, et quod amatur? VIII, 10, 14.
- (24) sed hic paululum requiescat intentio, non ut se jam existimet invenisse quod quaerit, sed sicut solet inveniri locus, ubi quaerendum est aliquid; nondum illud inventum est, sed jam inventum est ubi quaeratur. VIII, 10, 14.

これまでのところで、アウグスティヌスは三位一体の像を探究すべき場所として愛をとらえ、それが三つの契機から成ることを一応明かにした。しかし、これはいわば見出したと思っ¹⁾ているにすぎないので、果して求める三位一体の像がそこに露呈されるかどうか明かでない。愛の事象において見出された三つの契機が、各々独立に存立しながら、しかも不可分的に互に働きかけ、転入し合うかどうか、すなわち三位一体の機能を果しているかどうか、²⁾検討しなければならぬ。

愛は三つのものから成っているように見える。一、愛するもの、二、愛されるもの、三、愛。しかし、精神が自己を愛するときはどうであろうか。その場合には、愛するものと愛されるものが同一である故に、愛と愛されるものとの二つがあるのみである (IX, 2, 3)。それで、愛の事象には必ず三つのものが認識されるとはかぎらないように思われる。

そこで、いまわれわれの追求しているものを明かに見得るために、人間を構成する多くのものを却けて、精神 (mens) だけを取り扱うことにしよう。精神が自己を愛するとき、精神と愛との二つだけである。両者は互に他に関係するときは、夫々独立した一者であり、したがって二者あるわけであるが、各々をそれだけとして見るとき、各々が全体の精神である。こうして、はじめ三肢 (trius) が働き合うように見えた愛の事象を検討した結果、三肢が二肢 (duas) になった。愛の場所において三位一体の働きをする何ものかを見出そうとしたアウグスティヌスの探究が、ここでアポリアにぶつかる。求める三位一体はここにはないのであろうか。彼は絶望しない。神の永遠の光りがわれわれの闇を

照らすように祈り求めながら、彼は探究をつづけて行く。⁽³⁾

アウグスティヌスは認識 (*noscere, notitia*) の概念を導入することによって、このアポリニアに道を通じようとする。精神が自己自身を知らなければ、自己を愛することはできない。知らないものを愛することはできないのである。⁽⁴⁾ それで、精神が自己を愛するとき、精神とその愛との二者があり、また精神が自己を知るからには、精神とその自己との二者があるわけである。それ故に、精神の「自己―愛」の事象には、一、精神そのもの (*ipsa mens*)、二、愛 (*amor*)、三、自―知 (*notitia ejus*) の三肢がある。それでは、これらの三肢は各々独立に、また互に関係し合つて、如何なる働きをするであらうか。

一、精神が自己を少くもなく、多くもなく、完全に愛するとき、愛が精神全体に行きわたつて両者が等しくなる。また、精神の自―知が完全であるとき、すなわちより少くも、より多くもなく、丁度自己の全体を知りつくすとき、知が精神と等しくなる。この場合、愛が精神からはみ出すこともなく、また精神に行きわたらないこともなく、知が精神からはみ出すこともかけることもなく、三者が全く相覆う。⁽⁵⁾

二、愛と知は、色とか形とか、或いは性質とか量とかが或るものに内在するように、主体に内在するのではない。何故なら、色とか形とかは己れの内在するもの外へ出ることはないが、精神は自己とは別のものをも愛し知ることができるのである。それ故に、愛と知とは主体に内在するように精神に内在するのではなく、むしろ精神そのものがそうするように、実体的に存在する (*Quantobrem non amor et cognitio tanquam in subiecto insunt menti; sed substantialiter etiam ista, sicut mens ipsa. IX, 4, 5*)。

三、このように、精神と愛と知とは夫々が独立しているが、しかも互に離れて存在することができない。何故なら、

アウグスティヌスの『三位一体論』について（再論）

精神が自己を愛する所以の愛が存在しなくなれば、それと同時に精神も愛することを止すであろうし、同様に精神が自己を知る所以の知が存在しなくなれば、同時に精神も自己を知ることを止すであろう（IX, 4, 6: *tria eadem esse inseparabilia*）。

四、精神が自己の全体を知るとき、言い換えれば自己を完全に知るとき、彼の知は彼全体に行きわたる。また、精神が自己を完全に愛し、自己の全体を愛するとき、彼の愛は彼全体に及ぶ。このように、精神そのものは自己自身を愛し、自己自身を知る。これら三者、すなわち精神、愛、知は、精神が他の何ものによっても愛されず、知られないように、存在する故に、三者は同一の実体から成り、本質を同じくする。しかも、三者は混ざ合わされて一つになるのではなく、あくまでも三つでありながら、互に関係する（IX, 5, 7: *tria unius substantiae vel essentiae ac relativa esse*）。

五、精神が自己を知り、自己を愛するとき、これら三者の中に、精神、愛、知の三位（*trinitas*）がある。三者はそれぞれ自己自身でありながら、相互に全体である。各々が他の二者の中にあり、各二者が一人の中に在る。にもかかわらず、三位は混ざ合わされて一つになることがないのである。かくして、凡てが凡ての中にある。こうして、驚くべき仕方（*Miro iaque modo*……）、三者は互に分離されず、各自が別々に実体である。三者は相互の関係によってそれぞれ名をあたえられているが、同時に一つの実体、一つの本質である（IX, 5, 8: *ea tria esse singula in se ipsis, et invicem tota in totis*）。

以上の手続きによって、アウグスティヌスは精神、知、愛が三位一体を形成することを示す。ところで、この手続きの中核をなすものは、「精神は自己を知り、自己を愛す」ということである。すなわち、知と愛は精神のはたらき

として、精神を介して互に関係しているわけであるが、それは具体的にはどのような事態をさすのであろうか。精神は自己を知らなければ、自己を愛することができない。知らないものを愛することはできないのである。だが、精神は如何にして自己を知ることができるのであろうか。人間の精神のうちに、自—知が生れ、愛がめざめるのはどのようなのであろうか。自己を知ろうとする欲求 (appetitus) —— 愛 —— は、精神が何らかの仕方では自己を知らなければ起らない。しかも逆に、自己を知らないからこそ知ろうと欲するのである。精神の自覚をめぐるこの根源的な問題を、アウグスティヌスは如何に解決するであろうか。

アウグスティヌスはそれを二度試みている。第一の試み (IX, 6, 9-12, 18) —— 以下道と称す —— において、彼はプラトンのな道をとる。われわれが、一切の時間的なものを創造した永遠の真理のうちに、われわれがよつてもつて存在する所以の形相 (forma) を精神の眼で直観するとき、ものの知識 (vera rerum notitia) —— 概念 —— をはらみ、内にもつ。そうして、話すことによつて、それを生む。しかし、この説明では愛が如何にして精神のうちに生れるかが明かでない。そこでアウグスティヌスは、精神のうちに知が生れるに先立つてこの知にたいする欲求が現われ、知が生れるとこの欲求が愛となつて、生れた子である知と生みの親である精神とを結ぶという。つづいて彼は第十巻においてこの問題を再びとりあげ、遂に直接的自己意識の事実を発見する。これによつて、自覚における愛と知との関係の問題を解決したというよりは、むしろ問題処理の方法上新しい局面を開いたアウグスティヌスは、この意識の確実性を出発点として、この意識の光りの下に精神の機能を一つ一つ吟味し、かくしてこれまでの精神、自—知、愛の三肢とは別に、記憶、知性、意志 (memoria, intelligentia, voluntas) の三肢を得ることとなるのである。⁽⁶⁾

そこで先ず、アウグスティヌスの第一の試みを跡づけて行こう。彼によれば、知的認識は次のようにして成立する。

一、われわれは精神のまなざしによって (*visu mentis*)、凡ての時間的なものがそれによって造られた所以の永遠の真理の中に、われわれの存在の根拠であり、行為の基準である形相を直観する (IX, 7, 12)。

二、これによってわれわれはものの真の知識をばらんで、言葉 (*verbum*) としてわれわれの内に保有する。そうして、われわれが語るとき、われわれの内にこの言葉を生む (IX, 7, 12)。

三、この内なる言葉は愛によって——造られたものへの愛か、創造者への愛かによって——はらまれる (IX, 7, 13)。この認識は精神による形相の純粹直観 (*rationalis mentis intuitus*, IX, 6, 11) で、経験の要素を少しも必要としない。それは一方において知的直観であると共に、他方愛であって、自らの直観した形相を自己のうちにはらみ、保有する。これがものの真の知識 (*notitia*) で、アウグスティヌスはそれが言葉乃至概念 (*verbum*) として保持されると言っている (XIV, 7, 9 参照)。ところで、形相というのは事物の種的乃至類的な知識である。それはわれわれが不滅の真理を直観するとき得られるもので、ものが現にどうあるかの姿でなく、永遠の理 (*rationes sempiternae*) において如何に在るべきかの姿である。このような類的乃至種的知識 (*generalis vel specialis notitia*) は、多くの事物を肉眼で見渡して類似性を抽象することによっては生れない。アウグスティヌスはこのことを精神の知識 (概念) について次のように述べている。「⁹⁰というのは、われわれは肉眼で多くの精神を見て、類似性によって人間の精神の類的乃至種的な知識をまとめるのではなくて、不滅の真理を直観するのである。それは、この真理によって、誰か或る特定の人の精神が如何なるものであるかということではなしに、人間の精神が永遠の理にしたがって如何なるものであるべきかということを、われわれが⁹¹でき得るかぎり完全に定義せんがためである。」

このような精神の直観的な認識にたいして、感性的認識がある。現在われわれが考察している第九巻では、感性的

認識の構造が未だ充分に明かにされてはいないが、それによると感覚を通してものの像 (*phantasia, imago*) がこころにとり入れられ、何らかの仕方では記憶にきざまれる (IX, 6, 10)。第十一巻によると、例を視覚にとれば、この場合の認識は、一、対象 (*res ipsa*)、二、視覚 (*visio*)、三、視覚を対象に向ける精神の注意力 (*attentio mentis*) から成り、その結果ものの形象 (*forma, similitudo*) が生れる (XI, 2, 2)。

これら二つの認識はどのように関係するであろうか。言い換えれば、一方において永遠の形相を直観し、他方において形体的なものの過ぎ行く像を知覚する人間の機能は如何なるものであろうか。アウグスティヌスはこのような人間を、そびえたつ山の頂きに立って天と地との間の自由な空気をたのしみながら、澄み渡る天空を仰いで上なる静朗な光り (*serenissima lux supra*) に見入り、ふしては密雲 (*densissima nebula*) を見おろす人にたとえている。人間は理性によって直観する物の永遠の形相にしたがって、感性的認識によって知覚する物の像を、その真偽、善悪、美醜について判断し、矯正するのである (IX, 6, 11)。

それでは、精神の自—知 (自己認識) はこれら二つの認識の何れに属するであろうか。また、それは如何にして成り立するか。アウグスティヌスは第九卷十一章十六節でこの問いに答えている。

一、彼は先ず、「相」による一切の知識(認識)が、その対象に類似しているという原則を立てる (*Omnis secundum speciem notitia, similis est ei rei quam novit*)。したがって、精神は認識された相の幾分かの類似性 (*similitudo*) をもつ。

二、それで、われわれが神を知るかぎり、われわれは神に似る。しかし、神と等しくなるほどには似ない。何故なら、神が自己を知ると同じほどに、われわれは神を知らないから。また、われわれが身体的感覚によって形体的なも

の (corpore) を知るとき、その知り方の如何にかかわらず、そのものの或る類似性がわれわれの精神のうちに生じる。これが記憶像 (phantasia memoriae) である。しかし、精神のうちに生ずる形体的なものの像、すなわち表象乃至心像 (imaginatio) は、このものの相 (species) よりもすぐれている。何故なら、この形体的なものの表象は、このものよりもすぐれた本性、すなわち生ける実体たる精神のうちにあるからである。同様に、われわれが神を知るとき、われわれ自身神を知らなかったときよりもよくなるし、またわれわれの知識は或る程度神に類似したものとなる。しかし、この知識は神に劣る。何故なら、それは神に劣る本性、すなわち被造物なる精神のうちに生じるから。

三、以上から推して、精神が自己を知るとき生ずる知識 (notitia) は、精神の概念 (verbum — 言葉) と全く同一である。何故なら、この知識は形体的なもののように精神より劣ったものの知識でもなければ、神のように精神よりすぐれたものの知識でもないから。それで、一般に知識はその対象にたいする類似性をもつが、精神の自—知の場合には完全に等しい類似性 (perfecta et aequalis similitudo) が生ずる。かくして、この知識は像 (imago) であると共に概念である。すなわち、精神の自己認識は、感性的認識と同じ構造によって、自己のうちに対象たる自己の像を生む——表象する——が、もと知る自己と知られる自己、生む自己と生まれる自己とが同一であるために、ここに生じた像が自己の概念と完全に一致するのである。

以上によってアウグスティヌスは、精神の自—知が感性的認識の構造をもちながら、しかも自己を対象とするために、自己の形相の知的直観像 (verbum) と全く等しい心像 (imaginatio) を生み出すことを示した。精神の自—知はこれら二つの認識の中間に立つように思われる。ところで、精神の自—知が如何なるものであり、また如何にして生ずるかがこれで明かになったとしても、精神の自—愛は自—知との連関においてどのように説明されるであろうか。

精神が自己を愛するとは如何なる事態を言うか。また、この愛は如何にして生ずるか。アウグスティヌスは愛を精神の誕生——自——知の生起——に先立つ欲求 (appetitus) としてとらえ、これが動機となって自己の探究がはじまり、その結果知識が生れるのだとしている。したがって、知識にあこがれ、それをはらむ欲求そのものが、子として生れるとは言えない。この欲求はものが知られると、このものになたいする愛となり、生れた子である知識と生みの親なる精神とを結ぶのである。

- (1) adtendamus ista tria, quae invenisse nobis videmur.
IX, 2, 2.
- (2) aliqua tria et separabiliter demonstrari, et inseparabiliter operari. Sermo, 52, 6, 17.
- (3) Adtendamus quantum possumus, et invocemus lucem sempieternam, ut illuminet tenebras nostras, et videamus in nobis quantum sinimur imaginem Dei. IX, 2, 2.
- (4) Mens enim amare seipsam non potest, nisi etiam se noverit: nam quomodo amat quod nescit? IX, 3, 3.
- (5) Igitur ipsa mens et amor et notitia eius, tria quaedam sunt, et haec tria unum sunt: et cum perfecta sunt, aequalia sunt. IX, 4, 4.
- (6) アウグスティヌスは「三位」の精神、知、愛の三者が、相互輸入による「円環運動」(περὶ ἀλλήλων, circumincessio vel circumsessio) による「三位一体の像」を形成してこそこそを示す。

ただし、円環運動による三位一体そのものを証示する方法は、アウグスティヌスにおいては未だ充分に展開されておらず、*ヨハネの福音書* (Johannes Damascenus, c. 675—c. 749, A.D., De fide orth., I, 8, *Migne Patrologia Graeca*, 94, 825 B, 828) 以来はごらむべきであった教説として現われたと言われよう。Vgl. A. Schindler, Wort und Analogie in Augustins Trinitätslehre, 1965, S. 183f.

(7) Vgl. *Soliloquia*, II, I, 1; De libero arbitrio, II, 3, 7; De vera religione, XXXIX, 73; De trinitate, XV, 12, 21.

(8) アウグスティヌスは内的人間(精神)の内に神の三位一体のノナロキアを求め、その探究の過程を通じてのまやまな「三位」がとり出される。在る・知る・意識たる (esse—nosse—velle) の三位は『告白』(Confessiones, XIII, 11, 12) で最初とりあげられた。この三位は『三位一体論』には現われなかつたが、『神國論』(De civitate Dei, XI, 26-28) で再なりとらへ

アウグスティヌスの『三位一体論』について（再論）

われる。そこには本質・知・愛 (essentia—notitia—amor) の三位も現われる。ところが、『三位一体論』における「ノロキア」は『神国論』には出てこない。『三位一体論』では「先ず精神・知・愛 (mens—notitia—amor, IX, 2, 2—5, 8) が現われ、次に〔自己〕の記憶・知性・意志 (memoria [sui]—intelligentia—voluntas, X, 11, 17—12, 19) が、最後に〔神の〕記憶・〔神の〕知性・〔神のたごやめ〕愛 (memoria [Dei]—intelligentia [Dei]—amor [in Deum], XIV, 8, 11—12, 16) が現われる。最後の三位が人間精神における最高の「三位一体の像」である。

三

以上わたくしは、人間の精神の自覚をめぐる愛と知との問題、言い換えれば如何にして精神のうちに三位一体の像が生れるかという問題をとくために、アウグスティヌスのとった第一の道を検討した。彼は精神の自—知、いわば精神の生誕を知的直観と感性的認識との中間に立つ特殊の認識となし、これによって生れる個々の精神の像（表象）が、知的直観による精神の永遠の形相——これが直観されて精神にやどったものが概念、言葉である——と同一であるとした。精神の自—知は、感性的認識におけるような像性格をもちながら、しかも自己の概念と一致する知識を生むのである。この知識は個的であると同時に類的である。ところで、精神をしてこのような自・知へとかり立て、自己の知識を生むまでは休息せしめず、やがて知識が生れると、それと精神とを結ぶはたらきをするものが愛である。眠れる精神、平衡状態にある精神の中に突如一つの欲求が起り、精神をかり立てて自己の知識の探究へと向わせ、遂にそ

Vgl. La Trinité, texte de l'édition Benedictine, traduction et note par M. Mallet, O.P. et Th. Carnelot, O. P., I, 1955, p. 68-70,
 (6) Neque enim oculis corporeis multas mentes videndo, per similitudinem colligimus generalem vel specialem mentis humane notitiam: sed influemur inviolabilem veritatem ex qua perfecte, quantum possumus, definiamus, non qualis sit uniuscujusque hominis mens, sed qualis esse sempiternis rationibus debeat. IX, 6, 9.

れが得られると、それと精神とを固く結びつける。かくして、眠れる精神から三位一体の構造をもつ精神が生れる。これは人間における精神の生誕であるが、神の三位一体にこれを移せばどうなるか。永遠なる神の内にロゴスを生もうとする欲求が突如起り、神の永遠の平衡状態が破れて、ここにロゴスの生誕がはじまる。やがてロゴスが生れると、神は自らの生んだロゴスを愛する。これが聖霊のはたらきである。⁽²⁾それで、神のうちにおける三位一体の生誕は、神の内に行われる世界創造前の世界創造ということができよう。人間における精神、知、愛はこのような神の三位一体の像である。

しかしながら、この道によって知と愛との問題は果して解決されたであろうか。精神をして知を生ませるものは愛の欲求である。しかし、愛の欲求を引き起すものは何か。精神のうちに突如起る認識への欲求は、何らかの動機を必要とするのではなからうか。自己の何たるかを知らずして、自己を知ろうとする欲求が起るであろうか。逆にまた、自己を知らないからこそ知ろうと欲するのである。認識の始元をめぐるこの問題をアウグスティヌスはどう処理するであろうか。周知の通り、プラトンはたましいがイデヤに類似する個物を見ると、それを機会にイデヤを想起し、イデヤへ帰ろうとあこがれると言っている。個物の感性的認識を機会にイデヤへのエロスが生れ、イデヤの追及がはじまるのである。『三位一体論』第十巻において、この困難な問題を再びとりあげたアウグスティヌスは、これまで考察してきた第九巻におけるとは全く別の道を行くこととなり、精神の直接的自己意識の事実を発見、ここに三位一体探究に新局面を展開するにいたる。これが所謂第二の道である。

アウグスティヌスはいつものやり方にしたがって、日常的な手近かな経験の分析からはじめる。人は全く未知のものを愛することができない。そこで、学問の或る分野について、未だ知ってはいないが、しかしそれを知りたがって

いる学問好きの人がどのようなものか吟味しよう。

一、先ず勉強という言葉が普通あてはまらないようなことがらについて見るに、この場合には愛が噂さによって燃え立つことが多い。例えば、美人のほまれ高い人を一眼見たいとあこがれるようなものである。この場合は、精神がこれまで美しいものをたびたび見ているところから、ものの美の何たるかを類的に (generaliter) 知っているからそうなのである。このように美の類 (genus) が既に知られている以上、今燃え立っている愛が全く未知のものへの愛だとは言えない。

二、学問の領域では、多くの場合その道の権威者の称讃とか推薦とかが、そのことがらにたいする愛をわれわれのうちに燃え立たせる。しかしこの場合にも、われわれが当該研究部門についての知識をほんのかけらでももってなければ、それを学ぼうとする情熱は起らないであろう。例えば、われわれが或る言葉をきいたとき、少くともそれが無意味な音でなく、何らかの意味を担う記号だと知らねば、それを学ぼうとしないであろう。それで、ものが知られてはいるが、しかし充分に知られていなければいけないだけ、それだけこの未知の部分にたいする知識愛に精神が燃えるのである。

右の考察によつて、未知のものにたいする愛が既知のものによつて引き起されることが明かになった。しかし、現在の問題は「未知のものを知らうとする精神は何を愛するか」であつて、既知のものへの愛を問うてはいないのであるから、もう一度出直して検討する必要がある。

一、例えば、未知の語にたいする知識欲に燃える精神は何を愛するか。この場合は、精神が凡ゆる記号に関する知識 (notitia signorum omnium) を包含する学問が如何にすばらしいものであり、また社会生活における互の意見交

換の具である言語に通じることが如何に有用であるかを、ものの理におつて (*in rationibus rerum*) 知り、且つ見るから愛が起るのである。精神はこのふきわしく、有用な(言語)の相 (*species decora et utilis*) を識別し、知り、そして愛する。それで、未知の語の意味を求める人は、この相を自分の内で能うかぎり完全なものとするために学ぶのである。というのは、真理の光りの下でそれを凝視することと、自分の能力の範囲内でそれを欲することとは別であるから (X, 1, 2)。

二、或いは、人は自分の愛するものを既に類的に知っており (*jam genere notum habet*)、彼には未知であるが、多分人々によってほめたたえられている個物においてそれを知らうと努める。そうして、彼はそれによって愛へとかき立てられるであらうような想像的な形相 (*imaginaria forma*) をこころに描く (X, 2, 4)。これは直観による類的な知識が、想像力によって像性格をもつ形相としてこころに描かれ、この形相に触発されてこころが個物の認識へと向う、ということの意味するであらう。

三、或いは、われわれは或るものを永遠の理由の相において見、そこでそれを愛する。そうして、それが時間的なものの模像に表現され (*expressum in aliqua rei temporalis effigie*)、それを経験した人々の称讃をわれわれが信じ、その模像を愛するとき、われわれは何か或る未知のものを愛しているのではない (X, 2, 4)。

四、或いは、われわれは既知のものを愛し、そのものの故に、未知のものを探究する (*aut aliquid notum amamus, propter quod ignotum aliquid quaerimus*)。それで、われわれをとらえるのは未知のものへの愛ではなくて、この未知のものが帰属していることをわれわれが知るところのかの既知のものへの愛がわれわれをとらえ、かくしてわれわれは探究する未知のものを知るのである (X, 2, 4)。

五、最後に、凡ての人は知ること自体を愛する (*ipsam scire quisque amat*)。これはいやしくも知識欲をもっているくらいの人なら、誰しも知っていることである。

われわれが日常的な経験を観察するとき、未知のものを知らうとする人は、およそこのような理由によって未知のものを愛するように思われる。しかし、よく考えて見ると、これらの事例はすべて、人が既知のものによらずしては未知のものを愛し得ないことを示す。ところで、これらの事例は人が自己以外のものを知らうとする場合であって、当面の問題である精神の自己知にはかかわらない。そこでアウグスティヌスは改めて問いを提出する。「精神が自分にとって未知の自己自身を知らうと熱心に求めるとき、それは何を愛するか。」(*Quid amat mens, cum ardentius se ipsam quaerit ut noverit, dum incognita sibi est? X, 3, 5*)。

この場合にも、アウグスティヌスは「探究する精神」の事実から出発する。「精神は自己自身を知らんことを求め、この熱心によって燃えさかる。それ故に精神は愛している」(*X, 3, 5*)。これが「探究する精神」の事実である。それでは、精神は何を愛しているのであるか。言い換えれば、この事実を可能ならしめている理由は何か。これがアウグスティヌスの問いである。彼はこの問いにたいする可能な答えを一つ一つとりあげて検討する。

一、精神が愛するのは自己自身であろうか。これは不可能のように思われる。何故なら、精神は未だ自己自身を知らず、しかも何人といえども未知のものは愛し得ないから (*X, 3, 5*)。

二、普通われわれが不在の人の評判 (*fama*) をきくように、精神の評判が精神に己れの相を知らせるのであろうか。だがこの場合には、精神は自己を愛さないで、むしろ自己とは似もつかぬ想像の自己を愛するのである (*quod de se fingit, hoc amat, longe fortasse aliud quam ipsa est. X, 3, 5*)。

三、或いは、精神が自—知の如何に美しいことであるかを永遠の真理の理 (Ratio veritatis aeternae) の中に見つ、自分の見るこのものを愛し、それを自己自身において実現しようと努めるのであろうか。何故なら、精神は精神自身に未だ知られてはいないが、自己に知られることが自己にとって如何によきものであるかを知っているからである。

この事例についてのアウグスティヌスの批判は明かでない。彼は「精神は未だ自己を知らないが、自己を知ることが如何にすばらしいことであるかを既に知つてゐる」というこのことは、何と驚嘆すべきことであるか」(X, 3, 5)と言つてゐるが、これは今の場合肯定と見られない。

四、それともまた、精神は或るかかれた記憶によつて (per quandam occultam memoriam) 自己の最高の目的、すなわち安全 (securitas) と至福 (beatitudo) とを望見し、自己自身を知らないかぎりそこへ到達できないと信ずるのであろうか。かくして、精神はかゝるものを愛する一方、このものを求め、かの既知のものを愛し、かゝるものに未知のものを求めるのである。しかし、自己の至福の記憶だけは持続することができるが、自己自身の記憶はそれと共に持続することができないのは何故であらうか。かくて、到達しようと欲する目的を知ると同じく、そこへ到達しようと欲する自己自身を知ることができないのは何故であらうか (X, 3, 5)。

五、最後に、精神が自—知を愛するとき、それは未知の自己自身を愛するのでなしに、知ること自体 (ipsam nosse) を愛するのではなからうか。精神は知るとは何であるかを知つており、己れの知るこの知るはたらきを愛するとき、自己をも知らうと欲するのである。それ故に、もし精神が自己を知らないとするならば、精神は自分の知るはたらきを何によつて知るであらうか。それは精神が、自分は他のものを知つてゐるが、しかし自己を知つてゐない、ということを知つてゐるからである。何故ならそこからして精神は知るとは何か (quid sit nosse) ということをも知るので

アウグスティヌスの『三位一体論』について(再論)

ある。次にしからば、自己自身を知らない精神が、自分が何か或るものを知りつつあるということをどうして知るの
であろうか。理由はこうである。この場合、精神は他の精神が知りつつあるということは知らないが、自己自身が知
りつつあるということは知っている。したがって、精神は自己自身を知っているのである。更にまた、精神が自己自
身を知ろうとつとめるとき、つとめつつある自己を知っている。それ故に、精神は既に自己を知っているのである。
というのは、精神が自己を知ろうとつとめるとき、つとめつつあるが知ってはいない自己を知るからである (Novit
enim se quærentem atque nescientem, dum se quærit ut noverit. X, 3, 5)。

以上概観した考察を通じて、アウグスティヌスは精神を自己認識へとかり立てる欲求——愛——を引き起すものを
遂に発見した。それは精神が自己を知ろうと熱望していることの直接的意識に外ならない。「自己自身を知らんこと
を求め、この熱心によって燃えさかる」ところの「探究する精神」の事実は、このような自己の直接的意識に基づい
ているのである。アウグスティヌスは、既に『ソリロキア』(Soliloquia, 386 A.D.)の中で直接的自己意識の確実性に
ふれており、したがってそれより十数年後から執筆され、更に十数年を経て完結した『三位一体論』でこの事実を新
たに発見したということはできないが、しかし自己認識の始元をめぐる困難な問題を解決すべく思索をつづけながら、
この事実に到達したことはきわめて意義深いと言わねばならない。アウグスティヌスはこれによって、自己認識と神
の認識との探究、すなわち三位一体の追求のための確実な出発点を確保したのである。

(一) キットン (J. Guiton, Le temps et l'éternité chez Plotin 間が発生するのを説明するために、ヌースの内部へ「墜落」
et st. Augustin, 1933, p. 19) は、ノロキアが永遠から時 (chute) という非合理的な概念を導入せざるを得なかつたと言

ついでに。

(2) Vgl. IX, 12, 17.

(3) Soliloquia, II, 1,1: Ratio: Cogitare se scire? Augustinus: scio. De libero arbitrio, II, 3,7: Quare prius abs te quaero, ut de manifestissimis capiamus exordium; utrum tu ipse sis. An tu fortasse metuis, ne in hac interrogatione fallaris, cum utique si non esses, falli omnino non posses? De beata vita, II, 2,7: Scisne, inquam, saltem te vivere? Scio. De vera religione, XXXIX, 73: Aut si non cernis quae dico, et an vera sint

dubitas, cerne saltem utrum te de iis dubitare non dubites; et si certum est te esse dubitantem, quaere unde sit certum ... De trinitate, XV, 12,21: his ergo exceptis quae a corporis sensibus in animum veniunt, quantum rerum remanet quod ita sciamus, sicut nos vivere scimus? in quo prorsus non metuimus, ne aliqua verisimilitudine forte fallamur, quoniam certum est etiam eum qui fallitur vivere. フカトのロギタとの関係については Ch. Boyer, L'idée de vérité dans la philosophie de st. Augustin, 1921, p. 32-36 参照。

四

次に、アウグスティヌスがこの自己意識の事実を発見した手続きをもう少し詳しく検討しよう。彼は先ず「自己を—知らないこと」(non se-nosse)と「自己を—考えないこと」(non se-cogitare)とを区別する。彼の用いた例によってそれを説明すると、次の通りである。多くの学に通じた人が、たまたま芸術について考えている(cogitare)ために、文法のことを考えていない場合に、われわれはこの人が文法を知らないとは言わない。これは知も考も共に自己にかかわらない場合の例で必ずしも適切ではないが、しかしアウグスティヌスが se nosse と se cogitare とを否定形によって区別していることに注意する必要がある。精神が現に自己を考えていないからといって、自己を知らないわけではない。しかし、自己は自己を現実に考えるはたらしきによつてのみ生起する⁽¹⁾。精神が自己を考えるとき、自己自身が自分の視野に入り、自己を直視する。 cogitare によつて形成されるこの自己の明るい地平が自己意識の事実

に外ならない。

それでは、*se cogitare* は如何にしてなされるか。アウグスティヌスによれば、精神は自己以外の形体的なものの像 (*imagines*) なしに、自分だけで自己の中にあることができない。精神はこれらの形体的、感覚的なものの概念 (*notiæ*) によってしかものを考えることができないし (X, 7, 10)、たとえ形体的なものの像 (*phantasia corporum*) なしに何かを考えよと命じられても、そのようなものは存在しないと思いなす (*arbitratur*) のである。このようなわけで、人々は精神の本性——非形体的実体 (*mentis naturam et esse substantiam, et non esse corpoream*) ——を何か物質的なものと考えるにいたる。例えば、或る人は精神を血と考え、或る人は脳、或る人は心臓と考える。また、精神が微粒子から成っているという人もおれば、空気だ、火だという人々もいる (X, 7, 10)。

ここに精神の頹落——「不潔」(*immunditia*, X, 8, 11) ——がある。精神が自己だけを考えようとするにかかわらず、その助けなしには自己を考えることができないものと、自己とを同一視するのである。このような自—知の頹落態から本来の自—知を回復するはたらきが *se cogitare* である。すなわち、精神が意志の志向を自己以外の他のものから転じて、自己自身に向けることが *se cogitare* なのである⁽⁶⁾。

それには、しかし、精神が「自己だと思いなしているもの」(*quod se putat*) と「知っているもの」(*quod scit*) とを区別する必要がある。*se cogitare* のはたらきについて、このことを考察しよう。いま精神が自分は空気だと思いなしているとしよう。そうするとこの場合、精神は空気が知解のはたらき (*intelligere*) をすると思うわけである。この際、精神は自分が知解のはたらきをすることは知っているが、自分が空気だということは知っているわけではなく、ただそうだと思っただけである。そこで、思いなしていることは除外して (*secernere*)、知っただけであることを分け

出す (cernere) ことにしよう。精神が知解のはたらきをしつつあるということだけは、精神を空気と思いこんでいる人も疑うことができないのである。もちろん、凡ての人が精神を空気と思っているわけではなく、火、微粒子等々と思ふ人もいるであろうが、事情は変らない。これらの人は、自分たちが知解し、存在し、生きていることを知っているし、また意志し、記憶することも知っている (X, 10, 14)。

このようにして *se cogitare* から *se nosse* が生ずる。アウグスティヌスの *se cogito* は、対象の思惟 (*Denken des Objekts*) から、思惟する主体 (*denkendes Subjekt*) へ還帰することである。自己が自己を考える (*se cogito*) と言つても、自己を対象として考えるのではなく、むしろ考えつつある自己 (*ego cogitans*) の直接的自覚である。これが *se nosse* である。この自己意識の確実性は如何なる懷疑もこれをゆるがすことができない。

三位一体の像を人間のうちに追及するにあたって、神が愛であり、愛に居るものは神を見る、との聖書の權威にたいする信仰に手引きを求め、人間の愛の事象の中に神にいたる道をたずねて出発したアウグスティヌスは、今や人間における確実なものに到達した。これによって彼の三位一体追及が信仰にとつてのみでなく、知性にとつても確実な事実を出発点として確保したわけである。爾後の探究はこの自己意識の明るい地平で行われる。*se nosse* を常に確保しつつ、その光りの下に凡てを吟味しながら、探究が進められるのである。

彼のこの探究を跡づけることは本論の課題ではないが、アウグスティヌスは思惟の確実性から思惟する自己の存在の確実性を得、この手続きの途上で記憶、知性、意志 (*memoria, intelligentia, voluntas*) の三つを精神の基本的なはたらき——三位一体の像——として発見する。かくして、自己意識の事実から改めて出発したアウグスティヌスは、真理の永遠の光りの下で自己を知解すべく (*se intelligere*) 探究をつづけるのである。

(一) Tanta est tamen cogitationis vis, ut nec ipsa mens quodam modo se in conspectu suo ponat, nisi quando se cogitat: ac per hoc ita nihil in conspectu mentis est, nisi unde cogitatur, ut nec ipsa mens, qua cogitatur quidquid cogitatur, aliter possit esse in conspectu suo, nisi se ipsam cogitando. XIV, 6, 8. 此の如くは、*トダシキトヤキク* (M. Schmaus, Die psychologische Trinitätslehre des hl. Augustinus, 1927, S. 246)

此の如くは、*トダシキトヤキク* Das Sichdenken ist somit das unerlässliche Mittel für das Zustandekommen des Selbstbewusstseins.

(二) Cognoscat ergo semetipsam, nec quasi absentem se quaerat, sed intentionem voluntatis quae per alia vagabatur, statuat in semetipsam, et se cogitet. X, 8, 11.

(三) Vgl. M. Schmaus, op. cit., S. 237 ff.